

『色』で辿る大地と歴史 6 「色」で辿る、六郷満山と古羅漢

照山龍治

「六郷満山（ろくごうまんざん）」は、国東半島にある寺院群の総称である。六郷は両子山山稜に開けた6つの郷、満山はそこに建てられた寺院群を指す。

古来の山岳信仰が、宇佐神宮及びその神宮寺(弥勒寺)を中心とする八幡信仰、さらには天台系修験と融合した結果、神仏習合の独特な山岳仏教文化が国東半島において形成された。

歴史学者 中野幡能(なかのはたよし)氏は、「八幡宮は、奈良仏教に接近しすぎ、道鏡事件を起こした。主要な神職は厳しく罰せられ、宇佐氏出身の僧侶たちは、国東の山々に入るものが多くなった。これが「六郷満山」という山岳仏教の始まりだ」という。

その背景には、称徳天皇・道鏡による仏



教主導の政策に反対する、藤原氏をはじめとする貴族全般の反発もあったようだ。

一方、道鏡事件で失敗した朝廷は、最澄と空海を中国に派遣、天台・真言という山岳仏教を受け入れ、天台は日吉神社を、真言は丹生川上神社を鎮守とし、神仏協働による新宗教を建てようとした。その時に、頼りとしたのが八幡宮であったという。

そして、中野幡能氏は「特に、天台宗の僧侶たちは、八幡宮と協力して日本的本地垂迹説を起こし「権現信仰」という新しい信仰を作り出していく」、その中で、「豊国法師以来続いてきた仏教や道教、そして医術を取り入れた新しい形の宗教も、六郷満山の仏教の中に踏襲されていく」と言うのである。

(蓮華山富貴寺)

豊後高田市田染路(たしぶふき)に「蓮華山富貴寺」がある。天



台宗の寺院である。本尊は阿弥陀如来。平安時代に宇佐神宮大宮司の氏寺として開かれた。開基は、仁間と伝わる。

富貴寺大堂(おおどう)は、宇治の平等院鳳凰堂、平泉の中尊寺金色堂と並ぶ日本三阿弥陀堂のひとつ。建築は、平安後期(1086-1184)であり、現存する九州最古の木造建築物である。1952年11月22



日に、建物が国宝、堂内に収められた本尊の阿弥陀如来像も国重要文化財に指定され、2013年10月17日には、境内が国の史跡に指定された。

日本四壁画の一つとされる阿弥陀浄土変相図は、極楽浄土の世界を描いているとされるが、長い間、村の集会所や子供の遊び場として使われていたということもあり、残念ながら保存状態は良くない。

使用されている顔料については、東京文化財研究所の報告書にある。その中、名古屋大学の山崎一雄氏らの分析によると、赤は「朱砂」と「鉛丹」、「赤土(ベンガラ)」が使われており、黄色は「黄土」、緑は「緑青(ろくしょう)」、白は「白土」とされる。青と黒は不明とされているものの、大分県歴史博物館の資料では、青は「群青(ぐんじょう)」、黒は「墨」としている。

地方の阿弥陀堂に、高価な「朱砂」や「緑青」、「群青」が使われていることは、驚異的なことである。

拝観の後、昼食を採りながら、食堂のご主人に、この地域の現状を聞いてみた。

この食堂は四十年以上の歴史を持つ老舗で、「かつて、この地には数軒の食堂が店を構えていたが、後継者不足により、一軒だけになった」と寂しそうに話す。

(馬城山傳乗寺真木大堂)

豊後高田市田染真木に「馬城山傳乗寺真木大堂」がある。

傳乗寺は、養老2年(718年)に仁聞菩薩が開創した六郷満山の本山本寺8ヶ寺のひとつである。中でも、この傳乗寺は七堂伽藍を有し、田染地区には36の寺坊、そして朝日岩屋、夕日岩屋をはじめ無数の坊庵を持つ六郷満山最大規模の中心的寺院であった。

しかしながら、約700年前に火災によって焼失、そのため詳細な史料は残されていない。

その中で、真木大堂は、傳乗寺の堂宇の一つと伝えられ、国指定の重要文化財である仏像9体を有し、本尊の「阿弥陀如来」には、肉身に漆箔、螺髪に「群青」、衣に「朱砂」が塗られ、阿弥陀如来の周りに立つ「四天王」には、彩色はほとんど剥落しているが、随所に、「朱砂」、「緑青」、「黄土」が残っていると説明している。



(耶馬溪、羅漢寺、古羅漢)

六郷満山は宇佐神宮の東側にあり、西側には耶馬溪、山国川の上・中流域や支流流域を中心とした溪谷である。そこには「羅漢寺(らかんじ)」がある。

羅漢寺は、曹洞宗の寺院で、山号は耆闍崛山(ぎじゃくっせん)。

本尊は釈迦如来。日本国内の羅漢寺の総本山である。伝承では大化元年(645年)、「法道(ほうどう)仙人」の創建とされているが、創建したとされる仏教寺院の多さから「法道仙人」は複数で、後に



彼らを総称して「法道仙人」と呼んだのではないかとされている。その点は「豊国法師」や「仁聞菩薩」とよく似ている。また、羅漢寺は、開山時、「古羅漢」の場所にあったとされる。



その「古羅漢」には、天然の「空洞」に菩薩など数体の石仏と高さ220cm余りの毘沙門天磨崖仏があり、古来



より、羅漢寺とともに修行の道場であった。

空洞の上部を「天人橋」、最高所を『飛来峰』と言うそう。岩上には、室町初期の造立とされる県指定の「国東塔」もあり、経路の途中には、「雲僊窟」、「地藏窟」などが散在している。

その「窟」の中には、作風から、南北朝頃の作とされる「石造観音菩薩像」、その両脇には赤色と緑色が際立つ石仏があった。



東京文化財研究所等の分析によると、赤、緑、黄色、白、が確認され、赤土(ベンガラ)、緑土、黄土、白土が検出されたという。

(六郷満山に朱砂)

2000年3月31日の「保存科学39号」には、「大分県下の石仏の彩色について」として、大分県下の石仏や九州の装飾古墳の顔料についての東京文化財研究所の分析結果が掲載されている。

それによれば、大分県下の石仏には、色は、赤、オレンジ、黄色、緑色、白、黒が確認され、顔料としては、赤土(ベンガラ)や黄土、緑土、白土が検出され、

王塚古墳やチブサン古墳、五郎山古墳をはじめ九州の装飾古墳



には、色は、赤、オレンジ、黄色、緑色、青(灰)、白、黒が確認され、

顔料としては、赤土(ベンガラ)や黄土、緑土、白土、マンガン酸化物が検出されたという。

つまり、九州では、石仏や装飾古墳の顔料は、朱砂や緑青等のような希少で高価な顔料は使われていないということである。

その中で、富貴寺の壁画や真木大堂の仏像に、非常に希少で高価な「朱砂」や「緑青」、

そして「群青」が使われていることは極めて異例である。

宇佐神宮大宮司・到津（いとうづ）家に伝わる古文書のなかに「落浦阿弥陀寺（富貴寺のこと）は当家歴代の祈願所である」という記載があって、「富貴寺」は、宇佐八幡大宮司家によって創建されたものと推定されているそうだ。



一方、真木大堂にある仏像は、伝乗寺の各堂宇に伝えられたものを一箇所に集めたものとされ、その伝乗寺は、六郷満山の本山本寺の一つで、平安時代には七堂伽藍(がらん)を連ねたと伝えられている。

このようなことを考え合わせていくと、宇佐神宮と六郷満山は、中央政府との関わりを強くしながら、豊かな財力と最先端の技術力を身に着け、独自の文化を花開かせていたことが想像できる。それを、「朱砂」や「緑青」等の希少で高価な顔料が物語っている。そのような想いに至り、あらためて、ふるさと大分が持つ「地域の宝」の素晴らしさを、私たちに思い起こさせる。